

国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞ウチから見た日本語の多様性：
危機方言はおもしろい：方言にひそむ多様な発想法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000949

危機方言はおもしろい！方言にひそむ多様な発想法

時空間変異研究系教授 木部 暢子

はじめに

私は時空間変異研究系に属しています。時空間という、よく「三次元のことを研究しているんですか」といわれたり、工学部の先生に非常に親しみを持たれたりしますが、時間的な変化、つまり日本語の歴史と、空間的な変異、つまり方言を研究する部門です。ただ、時間と空間は、ことばのうえでも密接につながっているところがあり、古いものが地方に残るとよくいわれていますから、あながち三次元の世界ではないとはいえないと思っています。近年、このような古い方言が消滅の危機にあり、多くの言語や方言が消滅するといわれています。それらをできるだけ記録し、できれば消滅しないように子どもたちに伝えていく活動をしています。

二〇〇九年、ユネスコは世界の言語、約六千のうち約二、五〇〇が消滅の危機に瀕していると発表しまし

- 2009年、ユネスコは世界の言語約6,000のうち約2,500が消滅の危機に瀕していると発表しました。

UNESCO Endangered languages

<http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/>



図1 はじめに



木部 暢子(きべ のぶこ)

時空間変異研究系教授。博士(文学)(九州大学)。各地でお年寄りに地域のことばを尋ね、それを記録しています。20年くらい前までは、「方言は悪いことば」「方言なんて調べてどうするの」と言われることがありましたが、最近は「方言を残したい」という人が多くなりました。お年寄り子どもが方言で会話できるような社会が戻ってくるといいな、と思っています。専門は、日本語方言学。音声学。音韻論。主な著書に『西南部九州二型アクセントの研究』(2000)、『そうだったんだ！日本語:じゃって方言なおもしろいか』(岩波書店、2013年)、『シリーズ日本語史1 音韻史』(共著、岩波書店、2016年)などがある。

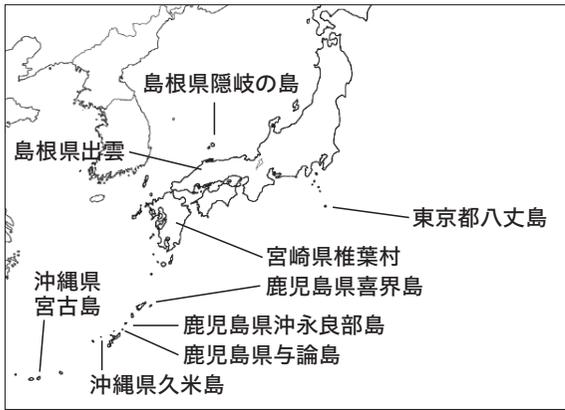


図2 調査場所

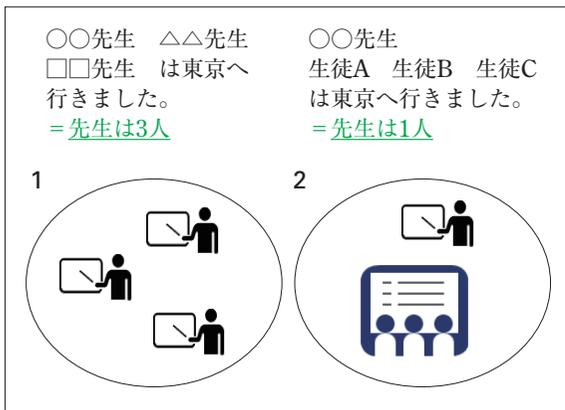


図3 クイズ1「先生たちは東京へ行きました。先生は何人でしょうか」

〇〇先生 △△先生
□□先生 は東京へ
行きました。
=先生は3人

〇〇先生
生徒A 生徒B 生徒C
は東京へ行きました。
=先生は1人

1

2

図3の1のパターンを思い浮かべます。しかし、与論島では、「先生は一人です」といわれたんです。先生のほかに生徒が三人一緒に行ったんだと。これは図3の2のパターンです。よく考えたら、共通語の「先生たち」は、先生一人とクラスの生徒三人が東京へ行ったときも使えます。私の北九州方言もそうです。

た。図1は、近いうちに消滅するといわれている言語の所在地を示しています。バルーンがたっていないところは砂漠や山岳地帯ですから、人が住んでいる地域は、ほとんど危機言語だけであることがわかります。

そのなかには、日本で話されている八つの言語が含まれていす。北からアイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語です。私は普段は南のほうの方言を専門に研究しています。この六年間に調査した場所を図2に示します。きょうはそのなかで奄美語のカテゴリにはいる鹿児島県の喜界島と、国頭語のカテゴリにはいる与論島のことばについて、フィールド調査で経験

した楽しいお話をして、皆様方にもフィールドの楽しさを味わっていただきたいと思っています。

与論島での経験―複数には二種類ある―

今日は、クイズを三つだします。最初のクイズは、「先生たちは東京へ行きました。先生は何人でしょうか」です。

先生は一人だと思う人。……。いらつしやいませんね。ほとんどの方は、先生は二人以上と思われまますよ。私もそう思っていました。ところが、沖縄県との県境で、沖縄本島の北が手の届きそうなどころに見える与論島へ行ったときに、「ええっ」と思うことがあったんです。図3をご覧ください。図3の1は、〇〇先生、△△先生、□□先生の三人がいますから、先生は二人以上ということになります。

私の出身は福岡県北九州市です。東京や大阪、北九州などの方言をひとまとめにして本土の方言といっています。比較的、共通語に近いことばをしゃべっています。私も「先生たちは東京へ行きました」と聞くと、図3の1のパターンを思い浮かべます。しかし、与論島では、「先生は一人です」といわれたんです。先生のほかに生徒が三人一緒に行ったんだと。これは図3の2のパターンです。よく考えたら、共通語の「先生たち」は、先生一人とクラスの生徒三人が東京へ行ったときも使えます。私の北九州方言もそうです。

なぜ、与論で「先生は一人です」といわれたかという点と、与論方言では、1と2で異なることばを使うからです。先生が二人以上いるときは、**図4**で赤く書いたところ（この文書では太く書いたところ）を高く発音して、「センセイターヤ、東京カティ イエータン」といい、先生一人と生徒三名の場合は、「センセイターヤ 東京カティ イエータン」といい、アクセントが違います（「センセイターヤ」の「ヤ」は「は」に当たる助詞です）。与論の話者は、2の場面を想定していたのです。最初、「センセイター」と「センセイター」の区別があるなんて思ってもいませんでした。与論島に行つて、「先生たちっていったって二種類あるよ」といわれ、びっくりしたわけです。

まとめると、次のようになります。複数には「同類の人が複数」という複数（正常複数）と、同類ではないけれど「近い関係の人が複数」という複数（近似複数。連合複数ともいわれますが、ここでは近似複数を使います）の二種類があります。英語のsをつける複数も正常複数です。与論方言では、この二つをアクセントで「センセイター」と「センセイター」のように区別します。一方、共通語は、正常複数と近似複数を区別しません。ただし、区別しないから二種類の概念がないのかという点と、そうではありません。その場に応じて、「せんせいたち」がどちらの意味を指すか、判断しているわけですが、この二つをきちんと理解しています。しかし、さきほどのクイズで「先生は一人」という回答がなかったように、二種類の複数形があることを、ふだんはあまり気にしていません。

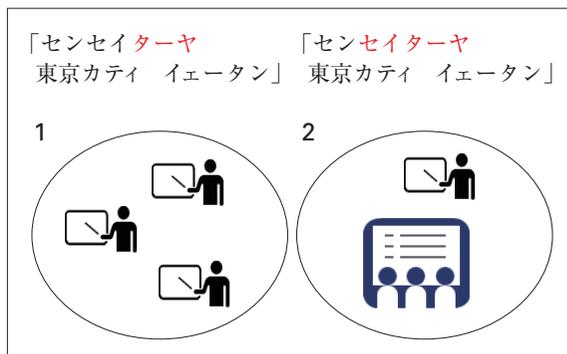


図4 「先生たちは東京へ行きました。」
鹿児島与論島方言では……

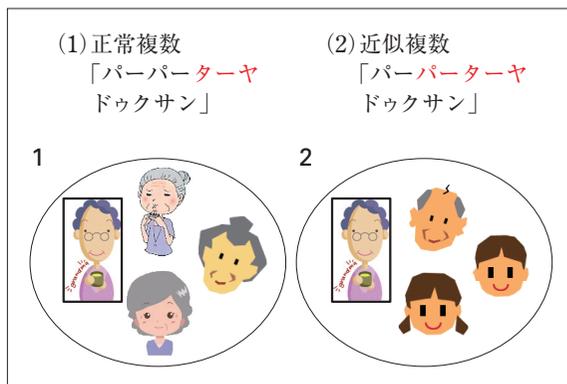


図5 与論方言「おばあさんたちは元気です」

与論方言の親族名称にみる正常複数と近似複数

このような例はたくさんあります。たとえば、与論方言で、「おばあさんたちは元気です」というとき、やっぱり二つあります（**図5**）。一つは正常複数で、花子お婆ちゃん、喜久子お婆ちゃん……たちが元気なときは、「パーパーターヤ ドックサン」といい、近似複数のお婆さんとお爺さんと孫たちという場合は、「パーパーターヤ ドックサン」といいます。

このような使い分けは親族名称に多くなっています（**図6**）。たとえば、授業参観にお父さんとお母さんがたくさんきていて、先生が「は

	単数	正常複数	近似複数
「お婆さん」	パーパー	パーパーター	パーパーター
「お父さん」	アチャ	アチャター	アチャター
「お母さん」	アンマー	アンマーター	アンマーター
「おばさん」	フバ	フバター	フバター
「お兄さん」	ヤカ	ヤカター	ヤカター
「先生」	センセイ	センセイター	センセイター
		↓ ○○が いっぱい	↓ ○○と その仲間たち

図6 親族名称にはこのような例が多い

	単数	正常複数	近似複数
		○○が いっぱい	○○と その仲間たち
共通語	せんせい	せんせいたち	
与論方言	センセイ	センセイター	センセイター

図7 与論方言の複数形をまとめると……

い、お父さんたちはこっち。お母さんたちはこっち」と誘導するよう
なとき(正常複数)、共通語では「お父さんたち」といいます。また、
お父さんを代表とする家族みんな元気ですというとき(近似複数)も
「お父さんたち」です。それに対し与論島では、正常複数の場合は「ア
チャター」、近似複数の場合は「アチャター」といいます(与論方言で
は「お父さん」を「アチャ」といいます)。

親族名称には、このような関係がほとんど成り立ちます。たとえば、
お婆さんの単数は「パーパー」ですが、正常複数は「パーパーター」、
近似複数(お婆さんとその仲間たちみたいな複数)は、「パーパーター」

です。お母さんは「アンマーター」と「アンマーター」と区別します。
正常複数のときは、どうも、アクセントが「ター」のところから上が
り、近似複数のときは、単数形のアクセントに「ター」がくっついてい
るようです。

この区別があることを与論島に行っているいろいろな場面で経験しまし
た。共通語では概念としては区別していますが、どの場合も同じ単語
でいってしまいます。共通語とは違う言語をみると、共通語のシステ
ムがまた新たに見えてくる、そういう楽しみがあるということなのです。

与論方言をまとめると、図7のようになります。正常複数と近似複
数は、共通語ではどちらも「たち」です。与論方言では、アクセントが
違ってきます。

喜界島での経験——二種類の「わたしたち」

二つめのクイズは、「『私たち』は罪人です。——『あなた』は罪人です
か?」です。これは、喜界島で経験したことです。

喜界島は奄美の一番北の端の島で、その北は点々と島が存在するト
カラ列島です。方言調査のとき、人称代名詞の「わたし」とか「あな
た」は基本項目ですので、必ず「わたし」はなんといえますか、「わた
したち」はなんといえますか、「あなた」はなんといえますか、「あな
たたち」はなんといえますか」と聞きます。「わたしたち」は、喜界島
でなんといえますか」と尋ねたところ、「わたしたちっていったって、
何種類もあるよ」といわれたのです。

たとえば、島に調査に行くと、島の人たちが歓迎会を開いてくれま

す。そこでのスピーチで、「私たちは東京から来ました」といいます(図8左)。そして、調査が終わって帰るとき送別会を開いてくれ、そこでのスピーチで、「あー楽しかったです。私たちは一緒に踊りを踊りましたね」といいます(図8右)。喜界島では、宴会の最後は必ず踊ります。三線を弾いてみんな一緒に踊るのが、締めくくりになります。そのようなことが調査のとき何度もありました。そこでそのようなスピーチをするわけです。共通語では、来たときの挨拶も「わたしたち」、帰るときの挨拶も「わたしたち」です。ところが、喜界島方言では、来たときのスピーチは「ワンナー」といい、送別会で楽しかったねというときは、「ワーチャ」といわなければいけないのです。どう違うかを、図9に示しました。「私たちは東京から来ました」というときの「私たち」は、聞き手を含みません。「私たちは一緒に踊りを踊りましたね」というときは、聞き手を含んでいます。この二つを言い分けるわけです。聞き手を含まない「私たち」は、聞き手を除外しているの、「除外のwe」と呼び、聞き手も含む「私たち」は、「包括のwe」と呼びます。これを間違ったら大変なことになります。島に来たときの挨拶では、「ワンナー」といわなければならぬのに、ちょっと覚えてたての島ことばを使おうと思って、「ワーチャ」というと、聞いている島の人たちは、「私は東京の人ではないよ」ということになりま

す。また、別れの挨拶で、「ワンナー」というと、「えっ、結局親しく

なれなかったのか」と思われてしまうわけです。

いろいろな国のことばを見ると、欧米にはこの二つを区別しない言語が多くなっています。英語もドイツ語、フランス語も区別しません(図10)。

中国語では、「我們(ウォメン)」と「咱們(ツァメン)」の二つの「私

世界の言語にみる「私たち」

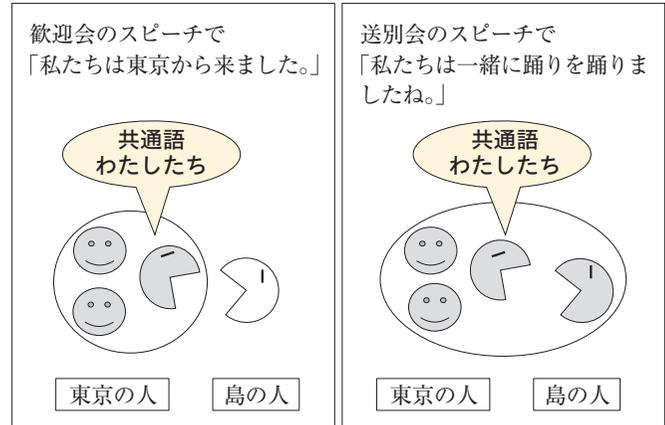


図8 共通語の「わたしたち」

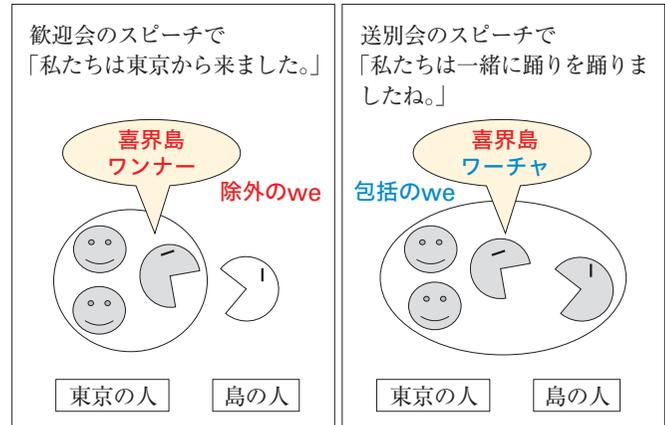


図9 喜界島方言の「わたしたち」

- ・英語の we、ドイツ語の wir、フランス語の nous は **除外**、**包括**の両方を表す。
- ・中国語の「我們(ウォメン)」は「**除外の we**」
「咱們(ツァメン)」は「**包括の we**」
- ・アフリカの諸言語にも「**除外の we**」と「**包括の we**」の区別がある。
- ・イエスベルセン(1860～1943)は次のような話を引用している。
ある宣教師が黒人たちに向かって
「われわれは、みな罪人です。われわれは、みな改心しなければなりません」と言ったとき、「いま私が語りかけているみなさんを除いて、わたしども」という意味の「われわれ」ということばを使ってしまった。(イエスベルセン著 安藤貞雄訳『文法の原理 中』185頁)

図10 2種類の「わたしたち」

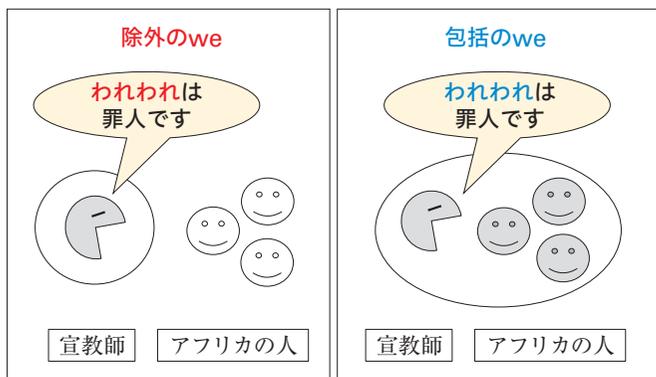


図11 「除外のwe」、「包括のwe」

- 共通語には除外、包括の区別がないか**
- 日本語に「除外の we」と「包括の we」の区別がないか、いろいろ探してみました。たとえば、「私たち」のほかに「私ども」「手前ども」という言い方があります。三省堂の『言語学大辞典』から引っ張ってきた例ですが、宿の主人がお客さんに向かって、
- a 「私たちは一〇年前からここで営業いたしております」。これは「除外の we」でお客さんは含みません。
- b 「私どもは一〇年前からここで営業いたしております」。これも「除外の we」です。
- c 「手前どもは一〇年前からここで営業いた

たち」があります。「我們」は「除外の we」で聞き手を含みません。「咱們」は、あなたも含んだ「包括の we」です。ただし、中国語では最近、この二つの使い分けが混乱しつつあるという話も聞きます。

アフリカの諸言語にも「除外の we」と「包括の we」の区別があります。いまから一〇〇年ほど前の言語学者、イエスベルセン(一八六〇～一九四三)が、次のようなおもしろい話を引用しています。当時、アフリカはイギリスやフランスの植民地で、キリスト教の普及がさかんに行われていました。あるとき、宣教師が現地の人たちに向かってい

いました。「われわれは、みな罪人です。われわれは、みな改心しなければなりません」と。キリスト教では、人間は原罪を背負って生まれてくるため、みな罪人であると教えます。そのとき、宣教師は「除外の we」(いま私が語りかけているみなさんを除いて、わたしどもという意味)の「われわれ」という現地のことばを使ってしまったのです。ほんとうは、「包括の we」を使わなければいけなかったのに。英語にはこの区別がないので、このような間違いをしたという笑い話です(図11)。

私は喜界島にいつて似たような過ちを犯しそうになりましたから、この宣教師の気持ちがよくわかります。

しております」。これも「除外のwe」です。

次に、「包括のwe」の例です。村長の息子が行方不明になったので、ある宿の主人が、大変だ、みんなで捜しに行きましょう、と別の宿の主人たちにいます。

a 「さあ、私たちも手分けして捜しましょう」。これはOKですね。聞いている人を含めた「包括のwe」です。

b 「さあ、私どもも手分けして捜しましょう」。これもOKです。もしかして、OKではないという方もいらっしゃるかもしれませんが、村長の息子に対して謙譲の意味が含まれるので、OKだと思います。この二つは「包括のwe」で、聞き手も含みます。では、

c 「さあ、手前どもも手分けして捜しましょう」は、どうでしょう。『言語学大辞典』では「だめ」という判断をしています。ただし、私はこれに関して、内省ができません。というのは、「手前ども」ということばを、日常生活で使ったことがないからです。皆様方のなかにも、あまり使ったことのない方が多いかもしれませんが。使った経験がないので、いいとも悪いともなかなか判断できません。そこで、「手前ども」は考察から外すことにしましょう。そうすると、「私たち」「私ども」は「包括のwe」と「除外のwe」の二つを表して区別がないこととなります。

喜界島を境界線として、それより北側は「包括のwe」と「除外のwe」

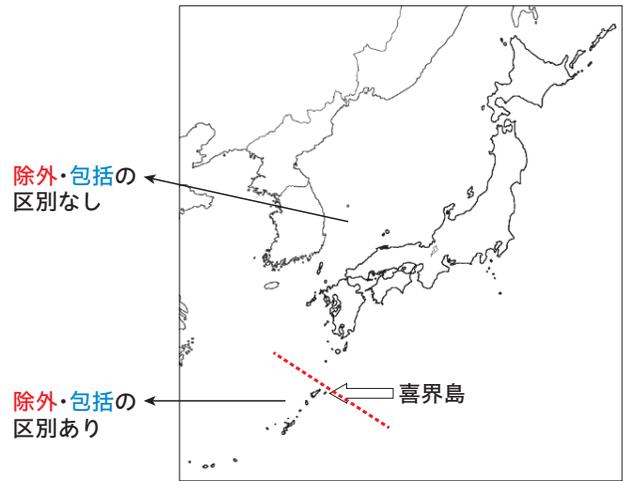


図12 「除外のwe」、「包括のwe」の区別

の区別がなく、南側は区別があります(図12)。奄美・沖縄にも区別がない方言がありますが、一般的に区別があるところが多くなっています。

与論島での経験——出来事を人に伝えるときに……

最後に、また与論島の話です。共通語では「聖徳太子は……と言った」とふつうにいいますが、与論島で「聖徳太子は……と言った」というと、「えっ、いつ聞いたの」といわれてしまいます。何が問題かというと、直接、聞いてもないのに、なぜ、「言った」といえるのか、ということなのです。

「おじさんは『明日海につれていく』と言った」(直接、聞いた)、「聖徳太子は『和を以て尊しと為す』と言った」(直接、聞いていない)の二つの「言った」を、共通語では同じ語形で見えますが、与論島では同じ語形ではいえません。自分がおじさんから直接聞いたときは、「フジョー『アッチャー ウンカテイ ソーユン』チ イエータン」といい、聖徳太子のときは、「イエータン」はだめで、「聖徳太子ヤ『和を以て尊しと為す』チチ ウワーチャン」といわなければなりません。「イエータン」を使うと、聖徳太子のことばをじかに聞いたことになり、話手が飛鳥時代に生きていたことになってしまいます。



出来事を人に伝えるとき、与論方言では、「自分が直接見たり聞いたりしたこと」とそうでないことを言い分けることが徹底しています。たとえば、話し手が「太郎が海に行ったこと」を目撃したときは、「太郎ヤ ウンカティ イキュータン」といいますが、たんなる過去の事実や目撃していないときは、「太郎ヤ ウンカティ イジャン」といいます。「イキュータン」は、関西の「行きよった」にあたります。これが、目撃したことをあらわすようになったのです。

また、話手の過去の経験の「私は 海に行った」も、「ワナー ウンカティ イジャン」といいます。なぜ、自分の経験が「イキュータン」

ではなく「イジャン」かという点、自分のことは自分で見えないからです。つまり、目で見ているか、見ていないかが重要なのです。言語学ではこれをエビデンシヤリティ、証拠性といいます。与論方言はそのことをとって、も大事にする言語です。まとめると、次のようになります。与論方言では、直接、見たり

聞いたりしたこと、そうでないことを言い分けます。「行った」は、直接、見たときは「イキュータン」、見ていないときは「イジャン」です。共通語は「行った」しかありません。自分のことは自分で見ることができませんから、自分の経験は「イジャン」です。

まとめ

三つのお話をしました。最初は、「○○がいっぱい」「○○とその仲間たち」の二種類の複数形の区別を共通語はしませんが、奄美の与論方言ではするという事です。二つ目は、聞き手を含めるか、含めないかの区別を共通語はしませんが、奄美の喜界島方言ではするという事です。三つ目は、自分が直接、見たり聞いたりしたことか、そうでないことかの区別を共通語はしませんが、奄美の与論方言ではするという事です。

では、どうして共通語にこの区別がないのか、共通語で言い分けたいときはどうするのか、という疑問がわいてきます。じつはこれらについても楽しいのです。ですから、危機方言はおもしろいという表題をつけました。このような方言がなくなってしまうと、こういう発見の楽しみがなくなってしまうと思います。楽しみがなくならないように、できるだけ危機方言を記録し、また伝えていきたいと思っています。皆様方も、できるだけこういう楽しい経験をなさっていただきたいと思っています。ありがとうございました。